

らどんなに体のためになるだろうと思いました。みんなもおそらくそう思ったと思います。そういう中で働いてきました、ドクトルのおかげで私は、命からがら無事に帰って来たのですが、いずれ中島は第一便のボルノエ患者で帰すからという言葉でしたので、それを信じながらマガダンから船に乗ってナホトカに帰ったのです。それも二昼夜ほどかかったと思います。そしてナホトカでも、それ相当の民主教育というか赤旗のようなものを教育されまして、舞鶴に向かったのです。

舞鶴に着いたのは十一月でしたが、きれいな日本の姿を見て、本当に庭園のように見えました。感激の涙で泣いたことを思い出します。家に帰ってから栄養失調で二年ばかり床に着いたまま、たまには往診を頼みました。が医者にもかかれず毎日を過ごしたのです。食べ物については非常においしいな、何もおかずがなくとも大丈夫、食べられる。このくらいありがたい食べ物はないなと感じたのです。ライスカレーを七杯ほど食べたのを記憶しています。まだ食べられると思っ

たのですが、家の者たちにやめろと言われましてやめたこともあります。助かったことをあのソ連のドクトルに感謝を申し上げる次第ですが、今でももし会えるなら私は会ってお礼がしたい。そういう気持ちです。

炭坑から警備兵宿舎へ

熊本県 山形 満治

国境をいつ越えたのか、はつきり覚えてはいません。収容所に着いたのは昭和二十年十月の初めではなかったかと思います。かつての収容所跡は柱だけが残っており、次の日からバラックつくりにかかりました。

金釘にはワイヤを切断して使い、屋根にはシートを覆い、ベチカには近くの炭坑のトロロッコを引っくり返して使うことになりました。鉄条網は初め一重でしたが、逃亡兵が出るようになったので、二重に張りめぐらせました。四角の望楼は、ソ連の警備兵が建てたのです。作業は石炭掘りでした。炭坑は斜坑になっており、

そう深くはなかったようです。先山から見ると、出口が小さく穴をあけているのが見えました。

最初は、ノルマらしいものはなかったように思いますが。たしかウオロシロフに近い炭坑のようでした。

給与は粗悪で、コウリャン飯が主食でした。スープは牛の頭や骨を煮ただし汁であり、肉片は一度だつて入っていたことはありません。夜になると、私たちは炊事場の裏に捨ててある、それらの牛の骨を拾いに行き、石でたたいて粉にしてスープをつくりました。とにかく腹が減って、歩くのがやっとでした。

収容所には千二百人くらいが入っていたと思います。しかし最初の冬が越せずに、多くの戦友が亡くなりました。前の晩、早く帰って白いご飯とみそ汁を腹いっぱい食いたい、といっていた隣の戦友が、朝起こしても起きないのです。さわってみると、すでに冷めなくなっているのです。

それら亡くなった人は、軽作業にしていた人たちが近くの丘に運んで埋葬したようです。私は兵隊に入る前に農業で体を鍛えていたので、何とか耐えて、常

にツルハシを振って先山で石炭を掘る作業ができたのだと思います。

初めのうちは、作業を終えた後ソ連人と一緒にシャワーを浴びて収容所に帰っていましたが、逃亡兵が出て以来、日本人捕虜のシャワーは禁止になりました。一日働いて真っ黒に粉塵を浴びても、風呂に入ることもなく、そのまま収容所に戻って横になるのです。ただ一回だけ、シャワーつきの列車が来て、列車の中で浴びたことを覚えています。

ある夏夕立が来て、炭坑の地下のくぼ地に水たまりができました。そこで警備の兵隊が水を浴びよ、というのです。濁ったたまり水で、ぼくたちは真っ黒に汚れた体を洗いました。

炭坑作業なので、冬の暖房には事欠きませんでした。トロツコを逆さまにしたベチカで、十分に石炭をたぐることができました。

昭和二十一年の後半になって、少しは給与がよくなりました。黒パンが渡るようになったのです。大きさは四百―五百グラムだったでしょうか。コウリャン飯

を食って、未消化のまま下痢気味であった人も、パンを食うようになって以来、胃腸のぐあいもよくなってきました。

私たちを警備するために、五百メートルくらいの位置に警備兵の宿舎がありました。多分内務省所属の兵隊だったと思います。人員は二十人前後だったと記憶しています。

明けて昭和二十二年の三月、私はこの警備兵宿舎の雑役につくよう命ぜられました。作業は宿舎の掃除から洗たく、炊事までまかされるのです。炭坑の作業に比べると、ここは天国でした。食事は十分にあり、警備兵と同じ黒パン、同じスープを食うことができました。収容所のスープは、くず馬鈴薯が二、三個入っているだけで、肉片など探そうとしても見つかりませんでしたが、警備兵宿舎のスープは、それこそ牛肉がふんだんに入っているのです。私はここの当番につけてもらったことを、神に感謝しました。地獄で仏とは、まさにこのことだったので。

ソ連の兵隊は、個人対個人の場合は、差別意識など

全くなく、私が日本人捕虜であることを感じさせないほど、一人の友人として接してくれました。ロシア語こそわかりませんでしたが、彼らの素振りや立ち居振舞いで、大方は理解することができたのです。

二か月ほどすると、私は警備兵の宿舎に寝とまりするよう命ぜられました。夜になると、彼らがそろって外出するので、留守番の必要からのようでした。

炭坑先山から、兵隊の宿舎当番へ、今思うと夢のような三年間でした。

シベリア抑留記

静岡県 丸山 義信

私は昭和十六年三月召集され、広島市に集合して満州の黒河街第七国境守備隊八四部隊砲兵隊に入隊し、北方ソ満国境にいて苦勞もありました。昭和二十年二月となり関東軍師団司令部一五二四通信隊に転属し通信街に移動することになり、八月十五日に通化にて終